

七十二柱の序列 0 番のヒキガヤ家

傲慢です

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

七十二柱は1～72の悪魔の柱その柱にはもう1つある。

目

次

設定

ハチマンの眷属

原初の悪魔 ヒキガヤ家

グレイフィア・ルキフグス

ヒキガヤ家

レオポルドの誕生日

17 14 11 8 4 1

設定

ヒキガヤ家

ヒキガヤ家は七十二柱の序列0番で原初の悪魔と呼ばれており悪魔の中でも飛び向けて強いと言われている、悪魔の中でも魔力に愛されており様々な魔力や独自の体術を持つと言われている。四大魔王のサポートを行つて、また、情も熱く眷属になった者は家族として迎え入れる。

ハチマン・ヒキガヤ

今作の主人公。ヒキガヤ家の現当主であり四人目の超越者で冥界の霸王や破壊者と呼ばれている、先の二天龍の戦いの時でも赤龍帝と白龍皇を圧倒するほどの実力を持つにも関わらず今だに自身を鍛えている。今のハチマンの実力は無限の龍神オーフィス以上と言つても過言ではない。強者との戦いを好む

ハチマンの魔力は二種類あり一つは暗黒の魔力と呼ばれており闇や煉獄等を操る物であり、もう一つは七大罪と呼ばれている魔力を持つこの力とマナゾーンと呼ばれる物で二天龍を圧倒した。年齢はサーゼクスと同じである。ハチマンの奥さんはグレイフィアでお互いに惚れて付き合いそして結婚し、今では4人の子を持つ父親でもある。ハチマンはグレイフィア一筋だがそれでも女性に物凄くモテる、グレイフィアを溺愛しているから他の男が口説こうとすると殺氣を飛ばして脅すことも暫しある。

今のハチマンの仕事は現四大魔王の仕事のサポートや手伝いをしている、レーテイングゲームの発案者でもありルールもハチマンが考えた物でハチマンが今後の悪魔の未来を考えて発案したのがレーテイングゲームである。

コマチ・ヒキガヤ

ハチマンの妹でセラフオルーと仲がいい、小さい頃からハチマンの事が大好きで今でも変わらず兄大好きの超ブラコン。グレイフィアの事はお義姉ちゃんと呼んでいる。実力は高くセラフオルーと互角

に戦える、魔力は氷を操るのと治療に長けている。

アンドreas・ヒキガヤ

ヒキガヤ家の元当主でありハチマンとコマチの父親である、二天龍の戦いの時はハチマンの邪魔をしないように見守っていた。アンドreasの実力も高いがハチマンより弱い、娘のコマチを溺愛しているがコマチからは凄く嫌われている。魔力は时空を操る物である。妻であるコーデリアには頭が上がらない。ハチマンの子供を可愛がっている。サーゼクスの父であるジオティクス・グレモリーとは親友でよく酒を飲みに行き娘の話や家族の事でよく話し合っている。

コーデリア・ヒキガヤ

ハチマンとコマチの母親でありそして初代魔王ルシファーの妹である、二天龍の戦いの時はハチマンと二天龍の戦いの邪魔にならない用に結界を張り守っていた。こつちはハチマンを溺愛している今でもその溺愛ぶりは変わらずハチマンとイチャついているグレイフィアに嫉妬することもある。魔力は魔王ルシファーの魔力を使う。怒らすと凄く怖いハチマンの子供たちも可愛がっている。ヴェネラナ・グレモリーとは親友でよくお互いの家に行つてはティータイムをしながら話し合っている。

レオポルド・ヒキガヤ

今作のもう一人の主人公。ハチマンとグレイフィアの息子で長男でヒキガヤ家の次期当主、リアスとソーナとは幼馴染みである。父であるハチマンの事を尊敬しており目標でもある、サイラオーグとは共にハチマンに鍛えてきた中でありお互いにライバルと認めている。魔力は煉獄で魔力を凝縮した腕とハチマンから教わったマナゾーンを駆使して戦う武闘派であり、グレイフィアからは戦い方がハチマンにそつくりと言われている。若手悪魔N.o. 1である。

マリアナ・ヒキガヤ

ハチマンとグレイフィアの娘で長女、兄であるレオポルドの一つ下であり兄と弟に妹が大好きなブラコン&・シスコン。マリアナは母であるグレイフィアの事を尊敬しておりグレイフィアの用になることを目標にしている。魔力は雷であるがハチマンの騎士である比古清十郎から剣術を習っている。理想の男性は自身の父であるハチマンらしい。

アリツサ・ヒキガヤ／カイル・ヒキガヤ

ハチマンとグレイフィアの双子の姉弟であり、家族が大好きな姉弟である。二人の面倒はハチマンの眷属達が代わりながら面倒を見ている。アリツサは大人しく少し人見知りな性格でカイルは優しく少しやんちゃな性格である。カイルはハチマンに家族を守れるぐらい強くなりたいと言つて以来ハチマンに鍛えられている、アンドレアスは二人に甘い。魔力はアリツサは植物を操りカイルは風を操る物である。年齢は6歳。

ハチマンの眷属

ハチマン眷属は冥界でも化け物揃いと呼ばれている、その強さは魔王と同じレベルの者が数人居りそれの他は最上級悪魔よりも強い者が多く集まつた眷属である。

グレイフィア・ルキフグス（ハイスクールD×D）

ハチマンの『女王』にして妻でコマチの義姉であり冥界最強の二大女王と称されるナイスバディの美女。かつてセラフォルーと自身の姉とコマチと最強の女性悪魔の座を争つたほどで、その実力は魔王クラス。自身の髪色から『銀髪の殲滅女王（ぎんぱつのクイーン・オブ・デイバウア）』という異名を持つ。

新旧魔王の戦争の時に旧魔王派のやり方が嫌になり姉と共に逃げたが追手に追われて姉を庇い姉だけを逃がしたが自分自身は追手に追い付かれ捕まる所をハチマンに助けられた。ハチマンに助けられたその後にハチマンに綺麗と言われて顔を真っ赤になつてハチマンに惚れてしまつた（ちなみにこの時にグレイフィアを見たハチマン自身も惚れてしまつたとの事。）その後はハチマンと恋人にそして結婚し妻となり今では4人の子を持つ母でもある。

今でもハチマンとはラブラブでプライベートの時は人間界に行きデートをしたり寝るときも一緒のベッドで抱き合いながら寝ている、誰もいない二人きりの時はハチマンの事を「主人様」と呼んでいる。他の眷属はグレイフィアに頭が上がらない。

天魔の業龍ティアマット（ハイスクールD×D）

ハチマンの『戦車』。で五大魔王の1匹であり龍王の中で唯一の女性のドラゴン。蒼穹のごとき鱗を持つ巨龍で、人間体は蒼い長髪に藍色の瞳の美女の姿を取る。司る色は青。

封印前のドライグに自分が収集していた伝説のアイテムの類を貸したことがあるのだが、ドライグが滅ぼされたために貸していた宝の数々も人間の盗賊に奪われて世界中に散らばつてしまつたがハチマ

ンと出会い共に全てのアイテムを見つけてもらつた、その事が切っ掛けでハチマンの眷属になる。

カルナ (f a t e)

ハチマンの『戦車（変異の駒）』で施しの英雄や不死身の英雄と言わ
れている人物である。母クンティーがアルジユナの父パーンドウの
妃となる前にマントラによつて太陽神スーリヤとの間に産んだ子。
不死身となる黄金の鎧を着て生まれたが、未婚の母となることを恐れ
たクンティーに川に流して捨てられてしまふがとある夫婦に拾われ
てそこで育てられた過去を持つ。

ハチマンとの出会いはカルナの魂だけで合つたがハチマンが精神
世界に行きそこでカルナと話し意気投合しハチマンの眷属となり、ハ
チマンの事をマスターと呼び慕つている。4つの宝具を駆使して戦
う。

マーリン (f a t e)

ハチマンの『僧侶』でアーサー王に仕えていた人物であり最高位の
座に位置する冠位の魔術師でもある、その証たる世界を見通す眼「千
里眼」の保有者。マーリンの千里眼は、何処に行かずともその時代
の万象全てを把握し、その顛末を読み取れるというもの。攻撃、防御、
回復魔法の使い手で防御魔法に関してはグレイフィアが全力で放つ
た魔力をいとも簡単に止めてしまう程の規格外でこれに関してはグ
レイフィアも驚いていたとか。

時崎狂三（デート・ア・ライブ）

ハチマンの『僧侶』で時の神であるクロノスと人間のハーフである。
常に「～ですわ」等のゆつたりとしたお嬢様口調で喋るが、いわゆる
壊れたヤンデレ気質の人物であり、いろいろな意味で危ない言動が多
い。興奮する時に行う「きひひひひ」と狂気的な笑い方が印象的であ
る。

神の時計と呼ばれる神器の所有者で時間を操ることが出来る。

ギヤスパーの停止世界の邪眼の上位神器である。ハチマンの事は様付けで呼んでいる。

サー・ランスロット（オリキヤラ）

ハチマンの『騎士』でアーサーに仕えていた人物で伝説の騎士でもあり聖剣アロンダイトの使い手でもある。剣の腕は高くサーゼクスの騎士である沖田総司と互角にやり合える唯一の騎士、ハチマンの事は様付けで呼んでおりグレイフィアの事も様付けで呼んでいる。

比古清十郎（るろうに剣心）

ハチマンの『騎士』で幕末にいた剣士の一人でありサーゼクスの騎士である沖田総司のライバルであつた緋村剣新の師匠でもある。人間嫌いな性格で山の中で住んでいた、そこにハチマンが偶々訪ねてきたその時にハチマンが人間ではないと見向いた。その後からちよくちよくやつてくるハチマンと酒を飲みながら話している内にハチマンに興味を持ちハチマンの眷属になつた。ハチマン眷属の中ではグレイフィアと同じ強さを持つ。

ウルス・サタナキア（オリキヤラ）

ハチマンの『兵士』（3個）でありグレイフィアと同じ番外の悪魔のサタナキア家と人間のハーフでもある。その強さはハチマン眷属の中でも中間になるがそれでも並みの相手では手も足もでないほどの実力である、神器の制御が出来ず暴走している所をハチマンに助けられたその後は眷属になり神器の制御が出来るようになつた。

神器は獄炎龍の大剣で禁手化にいたつて居るが余りにも強力過ぎるためハチマンの許可が降りない限り使わないと決めている。

趙雲子龍（一騎当千）

ハチマンの『兵士』（2個）であり三国志で有名な趙雲子龍の子孫である、長い銀髪を持つ物静かでクールな性格の女性。妖刀村正の使い手でもあり『斬龍』を駆使して戦い、コンクリートすらもやすやすぶつ

た斬るなどすることも出来るがランスロットよりも劣るがそれでも並みの相手では彼女には勝てない程の実力者、ハチマンの事はハチマン殿と呼んでいる。

オルカ・アガリアレプト（オリキヤラ）

ハチマンの『兵士』（3個）でグレイフィアと同じ番外の悪魔のアガリアレプト家と人間のハーフである。アガリアレプト家は嘘と眞実を見抜くことが出来る。派手な服装で自由な性格である、ハチマンからはよくはぐれ悪魔の討伐を任せられることが多くハチマンいわく仕事が早くそして的確であるから任せられるとのことである。神器は魔鏡創造で禁手化に至っている。

原初の悪魔 ヒキガヤ家

三大勢力の戦争、それは悪魔、天使、墮天使が冥界で起こした戦争である、そしてそこに2匹の二天龍と称される赤と白のドラゴン、ドライグとアルビオンの乱入によつて戦争は更に悪化してしまつた。各勢力は絶望の淵に立たされ今こそ結託して二天龍を封印しようとした。だが二天龍討伐のために共闘し奮闘している三種族は苦戦をしていた。それはそうだろう。数分前まで殺し合いをしていたというのに急に共闘など無理な話だ。

サー・ゼクス「ここまで強いとは」

セラフオルー「サー・ゼクスちゃん、魔王様達も亡くなつてしまつた今私たちはどうしたら」

サー・ゼクス「それはわかっているよ、セラフオルー。しかし、今の私たちに二天龍を倒せるのか」

アザゼル「このままじゃ、俺たちは全滅だなこりや」

ミカエル「二天龍、神を越える強さを持つドラゴン。どうにか封印が出来れば良いのですか」

アザゼル「それが出来ないから困つてるんだろうがミカエル」

赤龍帝ドライグがブレスを放つそこにはサー・ゼクス達がいた、悪魔達も墮天使も天使もサー・ゼクス達が死んでしまうと思つたがそうはいかなかつたなぜならサー・ゼクス達の前に一人の男が現れドライグのブレスを防いだからだ。

ドライグ「なに!? 我のブレスを防いだと」

ハチマン「久し振りに冥界に帰つてきたら二天龍が暴れているし悪魔、天使、墮天使が共同で戦つてゐるし何なんだマジで」

赤龍帝ドライグのブレスを防いだのはハチマンで合つた

セラフオルー「ハチくん!」

ハチマン「セラフオルーにサー・ゼクスか、魔王様達はどうした」

サー・ゼクス「亡くなつてしまつたよ」

ハチマン「全く下らん戦争なかするからだろうが」

コーデリア「バカな兄さんね、先に死んでしまつてわ。意味が無い

じゃない」

アンドレアス「本当、容赦がないな」

コマチ「お兄ちゃん、あのドラゴン達をどうにかしないと」

ハチマン「そうだな……殺るとするか、良いよな母さん」

コーデリア「ええ、思う存分暴れなさい」

ハチマンは一息つくと二天龍に向かつて行き魔力を放つ、その攻撃に気付いた二天龍はハチマンにブレスを放つがハチマンはそれを避けて赤龍帝の懷に入つた

ハチマン「全てを燃やすじん滅の炎、カリドウス・ブラキウム!!」
ハチマンの拳でドライグは吹き飛んでいつた、それを見た天使と墮天使にアルビオンは驚いていた、驚いていたアルビオンだが正気に戻りハチマンにブレスを放つがハチマンは魔力を纏つた拳でアルビオンのブレスを欠き消してハチマンはアルビオンを一瞬で目の前まで行き数回殴り付けた、アルビオンはそのまま地面叩きつけられた。

ハチマン「次」

ドライグ「蝙蝠風情が!!」

ドライグはハチマンに向かつていくハチマンもそんなドライグに向かつていくハチマンは魔力弾を放つたり魔力を纏つた拳で殴るなどドライグを圧倒していた、そこにアルビオンもやって来た、しかしハチマンは臆することなく二天龍二匹を圧倒していた。その光景を見ていたサービクス達が言つた。

アザゼル「怪獣だな」

コーデリア「私の息子を怪獣呼ばわりね。……殺すわよ」

アザゼル「(なんだよ、この殺氣は)」

サービクス「アザゼル、コーデリア様は魔王ルシファーリ様の妹なのですよ」

アザゼル「マジかよ、じゃあいつにもルシファーリの血を受けついているのか」

コーデリア「ええ、でも私はもうルシファーリではなく。ヒキガヤ家の者よ」

ミカエル「ヒキガヤ家?」

セラフオルー「ヒキガヤ家は七十二柱の序列〇番で原初の悪魔と言
われている家系よ、魔に愛されている家系もあるの」

アザゼル「原初の悪魔か、そこにルシファーもか。最強の悪魔だな、
あのハチマンつて奴は」

コーデリア「当たり前よ、ハチマンは強くなるために鍛えていたの
よ。魔獣が多い森の中でね、しかもその強さはあたし達家族を守る為
よ」

サー・ゼクス「そうですね、コーデリア様。ハチマンはそうゆう者で
すね」

セラフオルー「でも、ハチくんつて強者との戦うのが好きだよね」
アンドレアス「それが一番の問題なんだよな」

そんな話をしながらハチマンを見守っていた、ハチマンはドライグ
とアルビオンを相手に圧倒していた。ドライグとアルビオンは疲れ
ていた

ハチマン「もう終わりか、なら次は俺の番だな！」

ハチマンはそう言つてドライグとアルビオンに放つた。

ハチマン「マナゾーンカリドウス・ブラキウム連撃!!」

ハチマンはドライグとアルビオンに周りから四方八方の攻撃を食
らつていた。

ドライグ「こ、ここまで強さがあるとは」

アルビオン「二天龍の我らが」

ハチマン「このまま、燃え尽きるが言い!!」

ハチマンの攻撃でドライグとアルビオンは半殺しの状態で地面に
落ちた神すぐに二天龍を神器として封印したが神は力を失い亡く
なつてしまつた。

ハチマン「魔王が死に神も死んだ……これ以上無意味な戦いをする
のなら、そして慣れられ足りないのなら……俺が相手になるぞ。」

ハチマンは霸王色の霸氣を放ち悪魔、天使、堕天使で強者以外がバ
タバタと倒れていった。

ハチマン「やべえ、ちょっとやり過ぎたか。まあいつか」

この二天龍の戦いの後に三大勢力は休戦した。

グレイフィア・ルキフグス

三大勢力の戦争は休戦した、悪魔の方では新たにサーベクスを始め
アジュカ、ファルビウム、セラフォルーの四人が魔王になりそしてハ
チマンは四人のサポートに着いた。そしてハチマンは今サーベクス
達の仕事の手伝いをしていた

ハチマン「何でこうも争いは続くんだよ、旧魔王派の連中は悪魔を
滅ぼすつもりなのか」

ハチマンは資料を見ながら手を頭に起き呆れていた。

ハチマン「あいつ等は未来が見れないのか」

サーベクス「ハチマンの不満はわかるが今は争いを早くおさめる事
を考えよう」

ハチマン「それは分かっているがな……どうするかな。そう言えば
アジュカお前何か作っていたよな？あれはなんだ」

アジュカ「ああ、悪魔の駒の事か」

ハチマン「悪魔の駒？」

アジュカ「人間やドラゴン等他の種族を悪魔にすることが出来る物
でな」

ハチマン「……お前また俺の仕事を増やすつもりか？」

アジュカ「それなら大丈夫だ、悪魔の駒を貰う者の名前は石碑に登
録する事とそして悪魔の駒を貰う者は我々四大魔王がその場に居る
ことが条件だ」

ハチマン「確かにそれなら大丈夫だが細かい事は俺が決めるがそれ
で構わないか」

アジュカ「ああ、すまないな。只でさえお前に負担をかけてしまつ
て」

ハチマン「気にすることはない、それが俺の仕事だ……面倒臭いが
な。悪魔の駒はどの様な形なんだ」

アジュカ「チエスの駒と同じでそれぞれに力を与える」

ハチマン「……チエスの駒か」

それから数百年が経ちハチマンはいつも通りサーベクス達の仕事

の手伝いをしていると何かを感じ取ったハチマンが急に立ち上がつた

サー・ゼクス「ハチマン、急に立ち上がつてどうかしたか」
ハチマン「少し先の森が騒がしくてな、サー・ゼクスちょっと付き合え」

サー・ゼクス「わかつた」

ハチマンとサー・ゼクスはハチマンが感じた場所である森に来ていつた、すると1人の傷をおつた女性が走つてきた。

ハチマン「おい、あんた大丈夫か」

アリサ「はい、あの妹さんを助けてください！」

ハチマン「妹がいるのか」

アリサ「はい、この先に私を助けるためにお取りに」

ハチマン「サー・ゼクス、こいつは任せた」

サー・ゼクス「ああ」

ハチマンはそう言つて走つて向かつた、向かつた先には先ほどの女性と同じ銀色の髪の女性が複数の男達に囲まれていた女性は傷だらけで木を持たれてようやく立てるほどだつた。

モブ悪魔「大人しく捕まつて貰うぞ、グレイフィア・ルキフグスお前らこいつを殺す前に楽しむぞ」

グレイフィア「クズがつ！」

ハチマン「全くクズだな」

モブ悪魔「誰だ！」

モブ悪魔の声に姿を現すハチマン。ハチマンの姿を見たモブ悪魔達は怯えていた。

モブ悪魔「な、なぜ……き、貴様がここに」

ハチマン「俺たちの一族は魔力に愛された一族なんだ、少しの魔力の異変にも気付くさ。……さて、お前達は消えろ」

ハチマンはそう言つた途端にモブ悪魔達の足元から黒い炎が現れてモブ悪魔達を包み込み焼き殺された。

ハチマン「大丈夫か」

グレイフィア「ありがとうございます」

ハチマン「……綺麗だ」

グレイフィア「えつ！// // /」

ハチマン「どうかしたか」

グレイフィア「い、今// // // 綺麗と// // /」

ハチマン「す、すまない// // /」

グレイフィア「い、いえ// // // 気にしてません// // /」

ハチマン「取り敢えず傷の手当てをしよう、そこに姉も居る」

グレイフィア「!!本当ですか！」

ハチマン「ああ、サーゼクスに頼んだから大丈夫だ」

グレイフィア「ありがとうございます……私はグレイフィア・ルキ

フグスです」

ハチマン「ハチマン・ヒキガヤだ」

これがハチマンとグレイフィアの出会い、その後ハチマンとグレイ
フィアは恋人になり結婚し冥界一のおしどり夫婦となり四人の子に
恵まれる。

ヒキガヤ家

グレイフィア・ルキフグスとアリサ・ルキフグスを助けてから時は流れた。

ハチマンはグレイフィアに恋をしグレイフィアもハチマンに恋をした、お互いに想い合い恋人となり結婚した。サーゼクスもグレイフィアの姉のアリサと婚約し結婚した。アジユカが開発した悪魔の駒でハチマンは眷属を集める為に少しの間眷属探しの旅をした。そして今ヒキガヤ家は慌ただしかった理由はグレイフィアの出産で慌ただしかつたが無事に男の子が生まれた、その一年後には女の子が生まれた。兄妹の名はレオポルドとマリアナと名付けられた。それから7年が経つた。

ハチマンはレオポルドに魔力の扱いやマナゾーンを教えていた。

レオポルド「ハアア!!」

レオポルドはハチマンに向けて自身の魔力弾を放つがハチマンは動かない迫り来る魔力弾をハチマンは片手で受け止めた。

ハチマン「前よりも威力は上がってきているな、成長してるなレオ」

レオポルド「はい！」

ハチマン「だが、まだまだむらがある。そこを気を付けることだ」

レオポルド「分かりました」

ハチマン「よし、少し休憩にしようか」

レオポルド「つ、疲れた！」

ハチマン「ハハハ」

レオポルドはその場に寝転びハチマンはそんなレオポルドを見て笑っていた。そこへグレイフィアがやつて來た。

グレイフィア「ハチマン様、そろそろ」

ハチマン「もう、そんな時間か。レオポルド今日はここまでだな」

レオポルド「はい！父上、母上。仕事頑張って下さい」

ハチマン「ああ、行つてくるわ」

グレイフィア「レオも奥様と旦那様の言うことをちゃんと聞くのよ、マリアナの事宜しくね」

レオポルド「はい」

ハチマンとグレイフィアは仕事に向かいレオポルドはコーデリア達が居る場所に向かつた、コーデリア達が居る部屋に入ると

コマチ「レオちゃん！」

レオポルド「うわっ！」

レオポルドに突然抱き付いてきたのはレオポルドの叔母で父の妹のコマチ出会つた。コマチはレオポルドとマリアナを超がつく程可愛がつてゐる。

レオポルド「コマチ姉ちゃん、いきなりは止めてよ」

コマチ「えへへ、ごめんね。でも、可愛いレオちゃんが悪いんだよ

！」

コマチはそう言いながらレオポルドに頬擦りをしていた。

コマチ「マリちゃんもおいで！」

マリアナ「うん！」

コマチに呼ばれたマリアナもレオポルドに抱き付いた

マリアナ「えへへ、お兄様」

レオポルドはマリアナの頭を撫でるマリアナはもつともつとレオポルドの胸を擦りとしていた。その光景を見ていたコーデリアは

コーデリア「ふふ、本当に仲の良い兄妹ね」

コーデリアはそう言いながらレオポルド達を見ながら微笑んでいた、その頃ハチマンはサービクス達と仕事をしてゐた。

ハチマン「はぐれ悪魔の件が20件もあるのかよ……昨日もこれぐらいあつたよな」

ハチマンは呆れながら資料を見ていた、その隣ではサービクスとセラフオルーが居り今のハチマンの姿みて苦笑いしていた。

サービクス「最近こう言う事がよくあるからね……すまない、ハチマン。私たちが居ながら」

ハチマン「別にお前達のせいではないだろう……悪いのは眷属自身のコレクション見たいにしている者達が悪い。珍しいからと言つて勝手に眷属にしている貴族悪魔がな」

ハチマンは胃に穴が空いてもおかしくない位に呆れていた、そこに

グレイフィアとハチマンの兵士であるオルカ・アガリアアレプトがやつて來た。

グレイフィア「ハチマン、オルカを連れてきました」

ハチマン「サンキュー、グレイフィア」

オルカ「ハチマン様、次の仕事ですか」

ハチマン「はぐれ悪魔20件を頼むぞ、お前の目で見極めてから頼むな」

オルカ「分かりました」

オルカはハチマンから資料を貰い一礼した後に部屋を出た。

セラフオルー「ねえ、ハチマンくん。オルカの目の力ってなに？」
ハチマン「そう言えばセラフオルーには言つてなかつた、オルカには真実と嘘を見極める力を持つてる。それで確かめてからはぐれ悪魔の討伐をして貰つていい。はぐれ悪魔の中にはたまに訳ありではぐれ悪魔になつてしまふ者も居るからな」

セラフオルー「そりなんだ、ハチマンの眷属つて皆強いよね」

ハチマン「そうか？俺にはよく分からん」

サーゼクス「まあ、ハチマン自身が規格外の強さを誇るから仕方ないよ」

ハチマン「……規格外、サーゼクス後で覚えとけよ」

サーゼクス「なんで!?」

ハチマン「さあ、なんででしよう」

ハチマンはそう言つてはぐらかした

レオポルドの誕生日

皆さん、こんにちはレオポルド・ヒキガヤです。俺は今日で10歳になりました、今父上の友人が集まつており俺のパーティーをやつている。

レオポルド「凄いな」

ハチマン「まあ、お前からしたらそうなるな、現四大魔王が来ている時点でな……あいつら仕事はしてきたんだろうな」

父上はそう言いながらため息を吐いた

ハチマン「……パーティーが終わつたらグレイフィアとイチャイチャするか」ボソツ

レオポルド「(父上、相変わらず母上の事を溺愛しているな、もしかしたら弟か妹ができたりして……あれ? これつてフラグ建てたかな?)」

そう父上は母上を溺愛している人前でも平気で母上の胸を揉んだりキスしたりしている、母上は優しくもありながら厳しい人でもあるが父上の前ではデレデレである、父上曰く『グレイフィアを調教したんだよ、俺の者にするためにな。その明かしに首にチョーカーをつけてるからな』と言うことだ。そんな事を思い出していると父上はサイゼクス様の所に行つたすれ違いに友人でありライバルでもあるサイラーグがやつて來た。

サイラーグ「レオポルド、誕生日おめでとう」

レオ「おう、ありがとうよ。」

サイラーグは父上の弟子でもある、父上はサイラーグに武装色と見聞色の霸氣を教えた。サイラーグは産まれながらバアル家の魔力を持つて産まれなかつた上に魔力がなかつた、そんなときにサイラーグの母がハチマンを紹介して弟子入りした。

レオポルド「そう言えば今日だつたな、悪魔の駒を貰うのは」

サイラーグ「忘れていたのか」

レオポルド「いや、なんと言ふかまだ実感が無くてな」

サイラーグ「そうか」

サイラオーグと話していると妹のマリアナとサイラオーグの従姉であるリアスとリアスの友人であるソーナ・シトリーがやつて来た

マリアナ 「お兄様!!」

マリアナはレオポルドに抱き付いた、レオポルドはマリアナの頭を撫でた。

リアス・レオナルド誕生日おめでとう

ソリナーレホくん 談生曰おめでとう//

リニアとソーナはレオポルトは初の言葉を言った。ソーナだけは顔を真っ赤にしていた。ソーナ・シリリーはレオポルド・ヒキガヤに惚れている。

レオホルト二八九ありかとう」

サイテスアーティストとして活動している

卷之三

ハチマノニサリゴウ

ハチマン 「サリ、ゼクスから。プレゼントト

うけどな」

「レオ・ポルドくん、誕生日おめでとう。」
ハチマンが言った
「…」

レオポルドはサー・ゼクスから悪魔の駒を貰つた。

レノホルト「それで俺も眷属持サガ」

レオポルド「はい！必ず父上と眷属達を越えます」

バチマン一とう
頑張れよ】

クレイハイアーレホルト
眷属達と強くなりなさい
貴方なら出

卷之二

オボレダの誕生日。

レオボルドの誕生日パーティーは続いた。